

天野 慎二¹⁾辻 雅士¹⁾上間 健造¹⁾長江 浩朗²⁾藤井 義幸³⁾

1) 徳島赤十字病院 泌尿器科

2) 徳島赤十字病院 形成外科

3) 徳島赤十字病院 病理部

要 旨

悪性黒色腫は皮膚原発が大半を占め、尿道に発生することは稀である。55歳の女性が尿道出血を主訴に受診された。外尿道口6時の方向に小指頭大の易出血性の黒色腫瘍を認めた。画像診断にて明らかな浸潤、転移を認めなかった。腫瘍を切除、尿道悪性黒色腫と診断された。尿道部分摘出術、陰前壁切除術、膀胱瘻造設術施行。術後現在9ヶ月経過しているが、再発、転移を認めず、外来にて経過観察中である。予後は極めて不良であり、5年生存率は5%と報告されている。女子尿道に発生した悪性黒色腫の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

キーワード：悪性黒色腫、尿道原発

はじめに

悪性黒色腫は皮膚原発が大半を占め、尿道に発生することは稀である。今回我々は55歳の女性の尿道に発生した悪性黒色腫の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患 者：59歳、女性

主 訴：尿道出血

家族歴：特記すべきことなし

既往歴：34歳時僧帽弁置換術手術、42歳時ペースメーカー埋め込み術、53歳時慢性腎不全にて腹膜透析導入

現病歴：平成14年1月10日より尿道出血出現し、1月24日当院産婦人科受診。尿道腫瘍診断にて当科紹介受診となった。

入院時現症：外尿道口6時の方向に小指頭大の易出血性の黒色腫瘍を認めた。表在リンパ節も触知せず、全身皮膚に母斑、色素沈着などは認めなかった。

入院時検査成績：軽度の血小板の減少、慢性腎不全によると思われる、貧血、BUN、Crの上昇を認めた。

画像診断：X線、CT上では明らかなリンパ節腫脹

や転移は認めなかった。

以上より外尿道口腫瘍と診断し、2月6日尿道腫瘍に対し、腫瘍切除術施行。病理結果より尿道悪性黒色腫と診断された。平成14年2月22日尿道部分摘出術、陰前壁切除術、膀胱瘻造設術施行。術中迅速診断にて陰壁断端陰性であった。

組織学的所見：初回切除部周囲の表皮内、切除部直下に腫瘍を認めるものの、深部断端、辺縁には腫瘍は認めなかった。腫瘍細胞は明瞭な核小体とくびれのある円形、楕円形の核を持ち、大型異型細胞も混在している。核分裂像も散見され、褐色のメラニンも認められる(図1)。免疫染色では腫瘍細胞は、HMB45陽性(図2)、S100蛋白も陽性を呈していた。術後現在9ヶ月経過している。

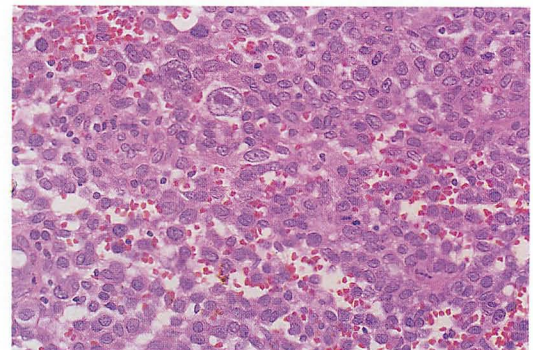


図1 摘出標本の病理組織像(強拡大)

腫瘍細胞は明瞭な核小体とくびれのある円形～楕円形の核をもち、メラニン色素も認められた(HE染色×100)。

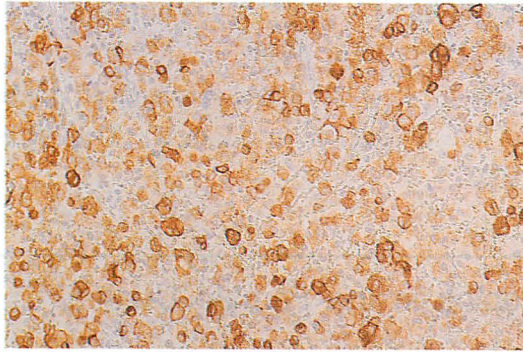


図2 摘出標本のHMB-45免疫組織染色

腫瘍細胞のほとんどがHMB-45染色陽性であった。

月経過しているが、再発、転移を認めず、外来にて経過観察中である。

考 察

悪性黒色腫は、色素細胞系の悪性腫瘍であり、転移を生じやすく、化学療法などにも抵抗性の悪性度の高い腫瘍として知られている。多くは表皮基底層部に存在する色素細胞(メラノサイト)の癌化によって生じ、腫瘍細胞がメラニン色素産生能を有するために、黒褐色調の皮膚病変として認められる¹⁾。

泌尿器科領域における報告例は極めて少なく、全悪性黒色腫中の1%以下とされており、原発部位としては大部分が陰茎と尿道である²⁾。本邦での女性尿道原発の悪性黒色腫は、1969年に前田ら³⁾が最初に報告して以来本症例は、25例目である。

過去の報告例²⁾⁴⁾をみると、本症の好発年齢としては60歳台が最も多く、ついで70歳台、50歳台が多くなっている。初発症状としては尿道部腫瘍や尿道出血が多く、大きさは栗粒大から鶏卵大である。診断は腫瘍が大きい場合やメラニン色素が多い場合は比較的容易であるが、そうでない場合は診断が困難なことが多い。自験例では黒褐色、易出血性であったため、悪性黒色腫が疑われた。

治療としては、手術療法が主体であるが、欧米では原発巣の切除範囲につき縮小手術の方向性が出されている。斉田ら¹⁾は、病期別治療原則を次のように提唱している。原発巣の切除範囲については、Tisは0.5cm、stage Iは1~2cm、stage IIは2~3cm、stage IIIは3~5cmのfree marginをもって切除。所属リンパ節郭清については、stage II以上でtumor thickness

が3mm以上の場合に行うと報告している。化学療法ではダカルバジン(DTIC)が最も効果的とされており、本邦ではこれにニムスチン(ACNU)、ビンクリスチン(VCR)を加えたDAV療法が頻用されている。その奏効率は26~37%と報告されており⁵⁾⁶⁾、術後の補助療法や進行病期症例に対する姑息的治療としてINFβとの併用療法が施行されることが多い。免疫療法は前述のように化学療法と併用されることが多く、インターフェロン単独では奏効率が7~15%と思うような効果は得られていない⁷⁾。最近では腫瘍内および皮下転移巣へのINFβの局注が試みられ、奏効率は22~47%であり、全身投与に比べ良好な結果が得られている⁷⁾。本症例では、約3cmのfree marginをもって切除した。病理組織像より筋層、周囲組織への浸潤を認めず、stage Iと診断されたため術後追加治療は行わず、外来経過観察中である。

本症の予後は極めて悪く、Steinら²⁾は5年生存率5%、Kimら⁸⁾が集計した海外の症例を含む48例のうち5年以上生存したのは6例にすぎないとしている。根治的切除術が行えなかった場合、効果的な追加治療が存在しないため、予後改善のためには、腫瘍の早期発見、治療が重要であると思われる。

結 語

1. 55歳の女性の尿道に発生した悪性黒色腫の1例を報告した。
2. 尿道悪性黒色腫に対し、尿道部分摘出術、膣前壁切除術、膀胱瘻造設術施行。術後現在9ヶ月経過しているが、再発、転移を認めていない。

文 献

- 1) 斉田俊明：悪性黒色腫の治療—最近の進歩と展望—。癌と化学療法 24：10-15, 1997
- 2) Stein BS, Kendall AR: Malignant melanoma of the genitourinary tract. J Urol 132：859-868, 1984
- 3) 前田義男, 岡部達士郎：女子尿道原発の malignant melanoma の1例。日泌尿会誌 60：347, 1969
- 4) 梶川博司, 高田昌彦, 瀬口利信, 他：女子尿道に原発した悪性黒色腫の1例。泌尿紀要 33：97-100, 1987

- 5) 石原和之：ダカルバジン．現代医療 19：783－785, 1987
- 6) DTIC 研究グループ：悪性黒色腫に対する Dacarbazine (DTIC)の臨床的研究．臨皮 36：183－188, 1982
- 7) 齊田俊明：進行期悪性黒色腫の治療法．皮の臨 38：1679－1683, 1996
- 8) Kim C. J. et al: Primary malignant melanoma of the female urethra. Cancer 71：448－451, 1993

A Case of Malignant Melanoma Developing in the Female Urethra

Shinji AMANO¹⁾, Masahito TSUJI¹⁾, Kenzo UEMA¹⁾
Hiroaki NAGAE²⁾, Yoshiyuki FUJII³⁾

- 1) Division of Urology, Tokushima Red Cross Hospital
2) Division of Plastic Surgery, Tokushima Red Cross Hospital
3) Division of Pathology, Tokushima Red Cross Hospital

Most previously reported cases of malignant melanoma originated from the skin, and rarely developed in the urethra. A 55-year-old woman consulted our hospital with a chief complaint of urethremorrhagia. A hemorrhagic melanoma of a small fingertip-size was detected in the 6 o'clock direction of the external urethral opening. However, neither apparent infiltration nor metastasis was detected by diagnostic imaging. After tumorectomy, a diagnosis of urethral malignant melanoma was made. Therefore, partial urethrectomy, resection of the anterior wall of the vagina, and cystostomy were performed. In 9 months of follow-up after surgery, there has been no tumor recurrence or metastasis. Currently, the postoperative course of this patient is being followed at the outpatient clinic. It has been reported that the prognosis of malignant urethral melanoma was poor, and that the 5-year survival rate was only 5%. This study reports the course of a female patient with malignant melanoma developing in the urethra, together with some bibliographical comments.

Key words: malignant melanoma originating from the urethra

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 8 :94－96, 2003
